古文：動作主・会話の相手・敬意の向かう先を分ける

講師用メモ・バージョン 2

5ページです。第1ページで動作主・受け手・話し手・聞き手・敬意の向かう先を分けます。第2ページの本文Aは説明用です。第3〜5ページでは別の本文B〜DでC1〜C6に取り組みます。短い抜き出しだけで終えず、本文の言葉を示して説明・現代語でのまとめを行います。尊敬語があれば常に直前の人物が主語になる、謙譲語なら身分の高い人が動作主になる、などの誤った規則にしないよう確かめます。女房はこの短文では宮中・貴族の家に仕える女性、童は仕える子どもという語彙の支えを用いますが、本文にない性格や感情を断定しません。許容する別表現と根拠を講師用メモで確認します。時間・順序は講師が選びます。実際の授業での試用はまだ行っていません。

練習問題の解答はこの講師用メモに分けています。編集版であり、実際の授業での試用はまだ行っていません。

本文B：人物関係を根拠とともに説明する

C1. 本文Bの「読み給ふ」と「申し上ぐ」について、それぞれの動作主と、敬意の向かう人物を整理してください。根拠となる本文の言葉を示してください。

解答・確認の観点：読み給ふの動作主は姫君で、給ふは動作主の姫君への尊敬。申し上ぐの動作主は女房で、話し掛ける相手の姫君への謙譲。姫君は文を読み、女房が戸を開けて話す文のつながりを根拠にする。

C2. 本文Bの二つの会話を、それぞれ誰が誰に話したか示し、使ひが門の外にいることと、待つよう指示することを分けて現代語で説明してください。本文にない理由や気持ちは加えないでください。

解答・確認の観点：女房→姫君：使者が門の外におります。姫君→女房：しばらく待たせよ。待たされるのは使ひで、女房へその対応を指示している。なぜ待たせるか・姫君の感情は本文だけでは決めない。自然な別表現を認める。

本文C：人物関係を根拠とともに説明する

C3. 本文Cの「とのたまふ」の動作主は宮でしょうか、僧でしょうか。会話の前後の言葉を示し、敬語だけで人物を決めてよいか説明してください。

解答・確認の観点：僧。会話の直前に僧、弟子にとあり、その会話を僧が弟子へ言う。冒頭の宮より文ありは文の来た方を示す。のたまふだけを見て、最も身分が高そうな人物を主語と決めない。

C4. 本文Cの「渡し侍りぬ」について、文を渡した人、受け取った人、この会話を聞く人を分けてください。分けた根拠を本文から示してください。

解答・確認の観点：渡した人は弟子、受け取ったのは里の人、会話を聞くのは僧。弟子が文を持って出て夕暮れに帰り、僧への報告として申すつながりによる。侍りはこの会話では聞き手への丁寧の表現。渡した相手と報告を聞く相手を混同しない。

本文D：人物関係を根拠とともに説明する

C5. 本文Dの「殿に水を奉れ」と、後の「殿に奉る」を比べてください。命じた人、実際に水を差し上げた人、水を受け取る人、奉るの敬意の向かう人を分けてください。

解答・確認の観点：命じたのは女房、実際に水を差し上げるのは童、受け取る人と奉るの敬意の向かう人は殿。女房、童にと言う会話と、その後の童の行動を対応させる。奉るがあるから主語を殿にするのは誤り。

C6. 本文Dの出来事を、殿・女房・童の動作が区別できるように二〜三文の現代語でまとめてください。どの言葉を根拠にしたか二か所以上示し、本文に書かれていない気持ちや理由を付け加えないでください。

解答・確認の観点：例：殿は縁側にいらっしゃる。女房が童に殿へ水を差し上げるよう命じ、童は水を器に入れて殿に差し上げる。女房は戸を閉める。根拠は殿は縁におはします、女房、童に、童、水を器に入れて、女房は戸を閉づなどから二か所以上。文数を守る自然な別表現を認める。

利用と出典表示

© 2026 MomentDesk / PRYADKO DANILA. 無料・有料の授業で利用し、自分の授業用に変更できます。共有時はMomentDeskの出典表示を残してください。テンプレートの転売や、自作としての再公開はできません。

文部科学省・高校国語編・言語文化、文語のきまりと敬語・読むこと（冊子117〜119/PDF123〜125）— https://www.mext.go.jp/content/20250410-mxt_kyoiku01-100002620_02.pdf#page=125